

コ ラ ム

日本の大学で Faculty Club は育つだろうか

Prof. R. I. L. GUTHRIE (カナダ, マギル大学) がちょうど 10 年前「鉄と鋼」(66(1980)p. 1574) 随想の中に東京大学の建物の貧弱なことを書かれている。東京大学でさえ、いわんや他の国立大学では、外国たとえ発展途上国の大学でもその施設はすばらしい。

筆者の東北大学工学部のキャンパスは駅からタクシーで 15 分、1200 円くらい、広々とした緑に囲まれた山の上にあり、すばらしい環境である。一転建物の内外はこれおぞましさと貧弱さにつきる。ほとんどの建物は築後 20 年前後なののである。しかしその中に 1 棟だけ立派な建物がある。内部の調度も日本の会社の本社ビルにも引けをとらない。国立ビルではない。同窓生と企業からの寄附による一種の同窓会館(青葉記念館)である。その 3 階に市内の由緒あるホテルの運営による、設備、雰囲気とも十分に外国の Faculty Club と匹敵できるようなカフェテリアがあ

る。ここでは 1000 円前後でスープからコーヒーにいたる昼食ができる。このカフェテリアができる前、昼食時我々は外国のお客さんが来るたびに Faculty Club がありませんので、との言いわけをし、もしあればと言いつけてきた。しかし、利用する人数が少なく、経営者が卒業生であるので依然オープンしているけれど、経営が苦しいらしい。たびたび、利用するようにとの薦めがなされているが……。

日本の教官は給料の安さのみが原因でなく、やはり学生と一緒にゴミゴミした、きれいと言い難い生協の食堂での昼食の方が心が安まるらしい。

430 兆円の公共投資からぜひ私共国立大学にも恵みがあり、すばらしい水槽の中の金魚がすばらしく育つように、心も広く、豊かになるような施設の中で教育・研究をさせて貰いたいものである。その時には月に 1~2 回、家族で Faculty Club で食事をとということになるかも知れない。(東北大学工学部 井口 泰孝)

編集後記

昭和 63 年、2 月の和文会誌編集委員会において、昭和 65 年(現:平成 2 年)の特集号テーマの検討を行いました。当時の製鋼担当の編集委員による事前のアンケート調査によれば、10 名中 4 名が転炉関係のテーマを挙げていました。過去の特集号のリストを見ますと、不思議なことに、転炉関連の特集号は一度も編まれておりませんでした。また、西山記念技術講座においても、採り上げられておりません。現在の転炉操業は、複合吹錬技術と溶銑予備処理技術の確立により、まさに、成熟期に入った観があります。さらに、炭材装入と炉内の強攪拌および 2 次燃焼技術の開発により、各種溶融還元やスクラップ溶解と、従来の製鋼炉としての機能以上の使われ方もされてきています。したがって、この時期に転炉操業技術の集大成の意味で、本特集号を編むことは意義深いことだろうということで衆議一決しました。テーマ名は、最近のトピックスを反映して、「転炉機能の拡大」としましたが、内容は、その他に、溶銑予備処理-転炉-二次精錬を組み合わせた高純度鋼製造といった最新の転炉製鋼技術や、それらを支える要素技術も含めました。さらに、転炉機能の拡大を可能ならしめた複合吹錬化に至る歴史的経緯とその冶金反応特性についても記録の意味で含めました。平成元年 3 月に第 1 回の特集号編集小委員会を発足し、鉄鋼大手 5 社と日新製鋼および大

学関係の精練研究者に編集委員をお願いし、以来、5 回の編集委員会を開き、特集号の構成や用語の統一等を検討しました。用語については、「複合吹錬」とするか「上底吹き」とするか、を話し合いましたが、各社でおのおの慣習があるので、特に、統一することはやめました。なお、「複合吹錬転炉の冶金反応特性」の解説では、上吹き転炉はすべて LD 転炉に統一しました。集められた原稿を見ますと、特集号のご多聞にもれず、かなり広範囲なものとなり、機能拡大という焦点は多少ぼけてしまった感がありますが、現在の転炉技術の最先端が網羅されているという点では、意義深いものになったと自負しております。

Q-BOP 導入直前の時点で、LD 転炉操業は一応の完成を見たと言われていましたが、その後の 10 数年の進歩発展には目ざましいものがあります。そして平成 2 年現在、再び成熟期を迎え、製鋼技術者の一部からは製鋼に関する研究開発は手づまりであるとの意見も漏れ聞こえてきますが、LD 転炉操業の完成の後の更なる発展を見れば、そのような心配は杞憂ではないでしょうか。鋼の品質向上のニーズがますます厳しくなる状況下に、製鋼関連の研究開発の可能性はいまだに無限であるとの感を、本特集号を編み終わった今、強く懐いております。

(M. K.)